

## 『アリアーヌ・ムヌーシュキン：太陽劇団の冒険』観劇レポート

### シャルユ (日本大学芸術学部 2 年)

『アリアーヌ・ムヌーシュキン：太陽劇団の冒険』を見て、人間が生きていくとき必要とされている強い、逞しいエネルギーを徐々に感じ、そこから人生の励ましをもらいました。

太陽劇団は名前を聴いたくことしかなく、どんな作品を上演するのかは知りませんでした。この上映会で太陽劇団の記録映像を見て、自分が太陽劇団と出会う入り口になったと私は感じています。特に、記録映像の中には自分の心に響いた名言がたくさんありました。記憶に残った言葉が二つにあります。一つは「虚無と対抗できる勇気をもつ」、もう一つは最後に話された「なるべく愛する」です。普段の生活ではあまり耳にした機会のない、考えたこともない言葉です。聴いた瞬間、心の中のモヤモヤが解消されて、これからの人生を考える、人生に向き合う勇気が改めて心の底から湧いてきたと感じました。

上映会の後、奥山緑さんの太陽劇団に関する説明から、この太陽劇団が多くの演劇人のパワースポットとなっていることを初めて知りました。確かに人生におけるパワースポットと言えるような素晴らしい劇団だなと、これからも自分の心の中の一つのパワースポットになるのだと私は感じました。

いつか機会があったら、フランスに行って、直接現場で太陽劇団の作品を見たいと思っています。

### 講評 奥山 緑 (日本大学芸術学部演劇学科教授)

感想ありがとう！なぜ演劇をするだけのことなのに、パワースポットの必要なのでしょうか？そしてなぜ太陽劇団が演劇人のパワースポットと感じられるのか？このことについて考えてみたいと思います。演劇を作りたいだけ、演劇作りに関わりたいたいだけなのに、人生と同じように「疲れてしまう」ことが多いからではないですかね。創造的に演劇作りに関わりたいたいだけなのに創造的になれない何かがある。それが疲れの元。自分を創造的にさせないものは何か？それは、もしかしたら組織、ヒエラルキー、自粛する気持ち…など、クリエイティビティというものとは関係の無さそうなあらゆる周りのものが邪魔だからでは？そう考えると、みんな同じお給料でお客さんと食事を分かち合いながら、集団創作で芝居を作るというなかなかの困難、はっきり言うと mission impossible にみえる事を太陽劇団がいろいろあるけど50年続けてきている、その現実への驚き——それが、この映画をみて伝わるほどはっきり存在しているからではないかな—と想像します。これからは太陽劇団「みたいな」創造団体を自分たちでも作っていけばいいですね。きっとこの映画が教えてくれるのはそのことかな、と私はいま考えています。